

小学校家庭科における食卓の座順調査と家族学習

井上えり子・中嶋 理恵

(京都教育大学・鳥取市立美保南小学校)

A Research of Family Member Sitting at the Dining Table and Family Education for the Elementary School

Eriko INOUE, Rie NAKAJIMA

2007年11月30日受理

抄録：鳥取県内の小学校保護者173名と児童105名、中学生158名を対象とした食卓の座席に関するアンケートから、食事作りや食事の世話をしている女性の座席は台所に近い位置にある点が明らかになった。本研究では、こうした食卓の座席の位置にみるジェンダー問題に注目して鳥取県内の小学校6年生(45名)を対象として授業を実施した。授業では食卓における家族の会話をテーマとした寸劇を子どもたちがつくり、家族の役割を演じることを通して既存のジェンダー規範に対する気づきを促し、新しいルールづくりを提案し実践する力の育成を目指した。本研究を通じて、授業における子どもたちのジェンダー意識や態度の変容を促し、家庭での実践に結びつける小学校家庭科プログラムを開発した。

キーワード：小学校家庭科、ジェンダー、食卓、座順、家族学習

I. はじめに

学校教育において家庭科はジェンダーの平等観やアイデンティティーの確立を図る上で重要な役割を担っており、授業では子ども自身が生活場面で具体的なジェンダー問題に気づくことが重要である。例えば、食生活に注目すると、食にかかわる家事の多くは女性が担っている点に子ども自身が気づく教材や授業構成が必要であると考えられる。

本研究では、食卓の座順に注目し教材化することによって、子ども自身がジェンダー問題に気づく授業プログラムを開発することを目的としている。食卓の座順に注目したのは、食卓の座席の位置に一定のルールすなわち主に家事労働を担当する女性が動きやすく台所に最も近い席に座っているというジェンダー問題が存在するという筆者らの仮説からであり、日常の生活事象の中にジェンダー問題が潜んでいることを気づかせる教材として食卓の座順に着目したのである。後述するように、石毛直道は「現代の大部分の家庭に共通する座順の原則というものは存在しない」¹と指摘しているが、筆者らは予備的な聞き取り調査から小学生のいる家庭では一定のルールが存在するという仮説を立てた。そこで、教材化の手順として、まず、子どもの家庭での食卓の座席の位置について調査し、そこに現れた家事分担や家族関係の問題点を分析する。次に、分析結果をもとに小学校家庭科においてジェンダー視点から家族学習の授業実践を試みる。

II. 研究方法

食卓における座席の位置を対象にした主な研究としては以下の3点がある。

井上忠司は食卓を「お膳」(箱膳など)、「ちゃぶ台」(しっぽく台、飯台など)、「現在」(椅子式テーブルなど)の3期に区分して聞き取り調査を行い、「お膳」期の銘々膳が家制度と結びついた形式である点や「ちゃぶ台」期のちゃぶ台を囲んで家族が団らんを楽しむようになった点を家庭論の視点から検討した²。また、文化人類学の視点から食卓の位置関係を検討した石毛直道は、「長方形の食卓の場合、単辺のひとつを家長にあたる人物がひとりで占め、長辺の両側に子供達、主婦は炊事場に近い短辺を占めるか、長辺の炊事場よりに座るというパタ

ーンがひとつ存在することが指摘できる。また、テレビの置かれている方向を空席にするすわりかたもなされるようである。しかし、現代の大部分の家庭に共通する座順の原則というものは存在しないといっていよい」と指摘している³。

いっぽう、村元直人は1998年に函館短期大学の学生97名を対象にして食卓の種類と世帯人数、座順が決まっているかどうか、テレビ観賞を中心にした座順であるかどうかを調査検討した⁴。注目すべき点は、椅子つき食卓よりも座卓の方が座順が決まっている比率が高いこと、また、座順が決まっていない理由について自営業などによるばらばらの食事形態、雇用形態の違いによる各人の食事時間のずれから食卓の座順が決まらなると推察している点である。さらに、座順を決める大きなファクターにテレビの存在を挙げ、第2次大戦以降のテレビの出現が食卓の座順をめぐるイロリの作法の伝統を崩壊させたという井上の見解を紹介し検証している。

これらの調査は食卓の座順についての知見を示しているが、教育の視点から子どもに着目して研究されるものではなく、さらに授業づくりを試みた研究は管見の限りでは見当たらない。従って、本研究では、まず、子どもの家庭での座順を明らかにするため実態調査を行う。

調査対象は鳥取県内の小学校の保護者212名、小学生105名、中学生158名である。調査期間は2003年10月から12月である。次に、調査結果をもとにして鳥取県内の小学校6年生45人(2クラス)を対象として2004年1月から2月にジェンダーと家庭生活に関わる授業実践を実施する。

Ⅲ. 食卓の座順調査

1. 仮説

本調査における作業仮説は以下の9点である。

1. 食事作りは多くが女性(母、祖母、妻、娘等)である。
2. 主に食事を作る人が、台所(流し)に近いところに席がある。
3. 家族の中で、女性(母、祖母、姉妹、叔母等)が台所に近いところに席を占めている。
4. 男性、特に父あるいは兄弟、祖父が台所から遠い席に位置している。
5. 和風建築で、食事を摂るところが座敷になっていて神棚がある家などは上座が決まっており以前の家制度の名残が座順にも反映している。
6. テレビを見ながら食事をする家族はテレビを見やすい位置に男性あるいは子どもが座っている。
7. 座席の位置関係とその理由を尋ねれば家族のおおまかな人間関係とジェンダーに関する意識が捉えられる。
8. 子どもがいる家族で小学生以下の場合是一緒に食事をする事が多く座順もほぼ固定している。
9. 子どもが大きくなるに従い、家族一緒に食事をする頻度が減ってくる。その場合は座順が固定せず流動的、または特定の席に複数の家族が時間差をつけて座ることがある。

2. 調査対象と調査内容

調査対象は鳥取県東部にある八頭郡内の小学校の保護者212名(有効票173、回収率81.6%、以下保護者調査と略記)と小学5年6年児童105名(有効票105、回収率100%、以下小学生調査と略記)、鳥取市内の中学生158名(有効票158、回収率100%、以下中学生調査と略記)である。「食卓の座席に関するアンケート」を児童生徒については配布しその場で記入させ回収した。保護者については児童にアンケートを持ち帰らせ、家庭で記入をしたものを学級担任に協力により回収した。アンケートの内容は全て同じものとし、小学生には漢字にふりがなをつけた。調査の内容は、①食事作りの担当者、②家族の共食の頻度、③座席の固定の有無、④現在の座席の位置関係(図示)、⑤その理由、⑥食事時の家事労働の担当者、⑦性別役割分業意識の有無、⑧小学校時代の座席の位置関係(図示、小学生を除く)およびフェイスシートである。

3. 調査結果

紙面の関係上、調査項目のうち、先に示した仮説に直接関わる項目の結果を示す。

①食事作りの担当者

90%以上の家庭で女性（母か祖母）が食事作りの担当をしていた。鳥取県が拡大家族の割合と女性の就業率が全国平均より高いため、祖母が食事作りに関わっている家庭が多く、祖母が担っている割合は小学生調査では50%、保護者調査では34%であった。

②食事作りの担当者と座席の位置

食事作りを母・祖母が担当者として回答したものうち、母・祖母の座席が台所に近いと答えた割合は7割を占めた。父親が食事作り担当と回答した1名の座席は父親が台所側であった。作業能率を考えると食事を作る人が台所側に席を占めるケースは多いといえる。

③父・祖父の座席の位置

父・祖父の座席が台所から遠い位置にあると回答した割合は、保護者調査58%、小学生調査54%、中学生調査37%であった。中学生調査は「座席が固定しない」割合が高いため、父・祖父の座席が台所から遠い割合は保護者や小学生対象の結果より低くなったものと思われる。

④建築洋式と「家」制度の影響

テーブルと椅子の使用が多く、畳みと座卓やそれ以外は少ない。また、神棚がある家は少なく、家制度の名残としての「男性が上座で女性が下座」を意識した座順は本調査では見られなかった。

⑤テレビの影響

本調査は食事作りの担当者と座席の位置関係の調査を主な目的としたため、テレビの影響を明確にする質問項目を設定していないためか、テレビに関する記述は非常に少なく座席固定の理由に散見される程度であったものの、「お父さんがテレビが見える席が決まっているから」、「子供はTVの見えやすい位置に座ります。」（保護者調査）の例のようにテレビが見やすい席に父や子どもが座る例は確認された。

⑥座席の位置と家族関係・ジェンダー意識・共食について

座順の固定の有無では、固定していると答えたものは保護者調査96%、小学生調査93%、中学生調査70%である。小学生のいる家庭の固定の割合が高いといえる。座順固定の理由をみると、家事担当者が作業しやすい位置にいと答えたものが約4割であった。中学生調査の座順を固定しない理由をみると、「空いたところに座る」、「その日、自分の座りたいところにすわればいいから」といった決まった席へのこだわりが薄れている例が見受けられる。また、家族全員の共食の割合は保護者調査（毎日54%）、小学生調査（毎日28%）、中学生調査（毎日52%）であった。小学生調査がやや低いものの、保護者調査と中学生調査では半数のものが家族全員で1日1回以上は食事をとっている。

以上の結果から、食に関わる家事労働は、主に母や祖母など女性が担当し、家事労働の能率から母・祖母の座席は台所側にある割合が多い点が明らかになった。また、小学生のいる家庭では食卓の座順が固定されるが中学生になると座順が流動化される点も判明した。

IV. 授業実践

1. 対象学校、学級、児童について

家庭科では、子どもが自分の家庭生活にじっくり目向け、その中で課題を見つけ、解決に向けた取り組みを行う。例えば、5年生の最初の題材「どのように生活しているのかな」では、自分自身の1日の生活を振り返ることによって家族との関わりや家庭の仕事に気づかせ、家庭科学習の導入としている。そして、これに続く題材では学習内容が家庭での実践に結びつくよう配慮されている。ここでは、家庭科のこうした問題解決型学習と生活実践を踏まえ、前章の調査結果をもとに小学校家庭科におけるジェンダー学習の教材化を行い、授業実践でその教育効果を検証する。教材化にあたり、対象児童には事前に「食卓の座席に関するアンケート」を実施する。

授業は筆者の勤務する鳥取県八頭郡のK小学校で2005年1月に実施する。学校の概要と当該学級児童の実態は以下のとおりである。なお、これは2005年1月現在の状況である。

K校の位置するK町は鳥取県の東部の人口8400人の町であり、豊かな自然に恵まれた地である。K小学校は1975（昭和50）年4月に町内の3つの小学校を統合し創立された。3校の中では児童数が最も多く規模の大き

い学校である。全校児童数 304 名で 14 学級あり、1 学級 20～30 名の児童数となっている。

なお、事前アンケートは 5・6 年生計 105 名に実施し、授業は 6 年生の 2 クラス 45 名（男子 25 名、女子 20 名）対象に実施した。

6 年生の家庭科担当教員からの聞き取りによると、対象児童には次のような特徴がある。

「家庭科が好きな児童が多い」、「女子がしっかりしていて、調理や被服実習では戸惑って困っている男子の世話をよくしている」、「1 組は発言も活発であり、のびのびした雰囲気、2 組は学習態度も真面目で集中力がある」、「調べ学習や作品提出は期限を守って行える児童がほとんどだが、一部技能面で苦労している様子が見受けられる児童は遅れがちになる。励ますと最後までやり遂げようと意欲を見せ、放課後も取り組む姿がある」。

2. 事前アンケートの結果

核家族は 19%であり、79%が拡大家族である。平成 12 年度の国勢調査では全国の核家族の割合は 58%であり、拡大家族のもとで育つ児童の割合が極めて大きい地域であるといえる。食事を家族全員が共にする回数は、毎日が 29%であった。

95%の家庭で座順が固定していた。そのうち母・祖母が、台所に座席に近い割合が約 7 割である。固定の理由としては、以下のように、父親・子供がテレビの見やすい位置、母親・祖母が台所に近い位置にあることが記述されていた。

「お父さんの好きなせき。わたしはテレビを見やすいせき。あとはない」「お父さんが一番テレビが見やすいいち」「自分がテレビがみやすいようにきまっている」「子どもがテレビを見やすいように」「ごはんの近くがおばあちゃん」「母は、ご飯をいれるのですいはんきに近い。あとはなんとなく」「とくにないけど、お母さんの席は台所と行き来しやすいところになっている」「母が食事中たつき、コンロなどに近い方が良いから」などである。

食事に関する家事労働の有無をみると、準備については自分もかかわると答えた児童は 50%である。食事の家事（皿やお茶などを取りに行くなど）についても 50%の児童が行っていると答えた。いっぽうで、3 割の児童は母親にすべてを依存している。

家庭の就労状況は共働きが 60%であり、母のみ 7%と合わせ 67%の母親が就労しており、女性の就労率は非常に高い。性別役割分業意識については「反対である」が 67%、「やや反対である」12%で、8 割の児童が反対である。

このように、当該児童はジェンダーの平等に対する意識は高いが、実際の生活場面では母親に依存しており、意識が必ずしも行動に結びついていない点を指摘することができよう。

3. 教育方法

学校現場ではロールプレイング⁵やシミュレーション、ランキングなど多様な手法を取り入れた学習形態を開発し、子どもに実践力をつけようという動きが広がってきた。鳥取県の小学校では、主にこれらの手法は人権・同和教育の学習に導入されることが多い。

ロールプレイングは自発的に役割を演ずることによって人間関係を新しく見直していこうとするものである。人間関係について学ぶ家庭科の授業の中で、いくつかの具体的な場面を設定したロールプレイングを活用することは有効である。また、コミュニケーション能力を培う上でも役に立ち、父や母、祖父母、子どもなど様々な立場や役割を考え、演じることでその思いや考えに共感し、家族の役割を改めて見直していきたい。

ロールプレイングを導入する場合、次の 3 つのパターンが考えられる。

①完成された脚本を利用、②未完成の脚本をもとにその場で演じる、③脚本を使わず、即興で演じる。①は比較的実施しやすい、②は学習者自身の経験や判断、思いが表れやすく、③は学習者の判断や発言、場合によっては本音を引き出すこともできるが信頼関係がないと失敗する可能性も高い。ここでは児童の状態から判断して②の手法を採用することにした。

4. 指導計画と学習指導案

3 学期は、年度当初 11 時間で単元「よりよい生活をめざそう」が計画されていた。この時期は 2 年間の家庭

科のまとめの学習であるが、この中に家庭生活を振り返り、ジェンダーの視点から性別役割分業の問題点に気づかせ家族や家事分担の在り方について考える内容を組み入れることにした。授業は2回（3時間）であり、1回目は2時間続き、2回目は1時間で実施した。

以下に指導案を示す。

第6学年 家庭科学習指導案

授業者 中嶋 理恵

- 1、日時 平成16年1月
- 2、学級 6年1組
- 3、場所 ふれあい室（図書室）
- 4、題材名 よりよい生活をめざそう ～私と家族・近隣の人びととの生活～
- 5、題材について

題材設定の理由

現代の日本社会は、都市化現象や価値観の多様化、少子高齢化など多くの問題を抱え、人々との連帯意識は希薄となり、社会的無関心や個人主義が生まれ、深刻な状況となっている。そんな中において、子ども達が健全な成長を遂げていくためには、生活の拠り所となる家庭、そして自分の家庭生活と深い関わりを持つ地域社会での人間関係をうまく築いていくことがますます重要となっている。ここでは、2年間の家庭科学習の最後のまとめとして、希薄になりつつある人間関係の問題を家族関係や近隣とのつながりから見つめ、考えていく。そして、家族や地域の人々への理解を深め、温かな心を育てることをねらいとする。

題材の目標

1. 家庭生活は、性別に関わりなく、互いに責任を担い、協力し合っていくことが大切であることが分かる。
2. 家庭生活は近隣などの地域社会と密接に関わり合っていることが分かる。
3. 近隣の人々や自分の家庭生活についての課題をもち、工夫して解決を図ることができる。

6、児童観

本学年6年生は、学校行事など自分たちが中心となり、性別に関わりなく協力しながら取り組む様子が見られる。家庭科の学習態度も真面目であり、調理実習や布を使った制作では、手順よく作業を進めることができる。中には、ノートや作品の提出が遅れがちな児童が数名見られるが、声をかけて励ますと、懸命にやり遂げようとする。5、6年生を対象に行った「食卓の座席に関するアンケート」では、以下のような特徴がみられた。

1. 食事作りは、母親と祖母（46%）、母親（40%）、祖母（5%）と9割は女性が負担している。
2. 食卓の座順は105名中98名（93%）の家庭で固定しており、多くが食事作りを負担している母親あるいは祖母などが台所に近い、動きやすい所に位置し食事時の世話も行っている。
3. 座順が固定している理由を尋ねる設問で、「お母さんが動きやすいように」という記述が見られ、すでに性別役割分業を意識していることがうかがえる。
4. 役割分業意識については「反対・やや反対」が6割、「賛成・やや賛成」が1割、「どちらでもない」が2割、「分からない」が1割であった。
5. 食事の際にご飯や汁を入れるなどの準備をする児童は58名（55%）、食事中に皿やお皿を取りに行くなど席を立つのは79名（75%）である。

このことから、多くの児童が、家庭内で母親や祖母など女性が食事作りや食事時の世話をしている姿を日常的に目にしている実態が浮かび上がった。また、児童自らが食事作りや準備などに積極的に関わっているとも言い難い。

近隣の人々とのつながりにおいては、これまで総合的学習等でゲストティーチャーとして多くの方を学校に招いたり、調べ学習で関わったりする機会があり、お世話になっているという気持ちを感じている。また、最近では個人差はあるものの、学校の行き帰りに出会う人たちにも自然と挨拶できるようになってきた。

そこで、家事分担と家庭生活の在り方を考える学習においては、ロールプレイングを取り入れ、性別役割分業

の問題点に気づいたり、家族の一員としての自分の役割について考えたりする。グループによる活動を中心にし、脚本を作ったり、役割を交代しながら家族のいくつかの立場を演じて、感想を出し合ったりすることを通して、友達同士の関わりをより深めることも大切になりたい。このような人間関係作りを基盤としながら、実際の家庭生活を通して地域の人々との心の交流や実践の力につながるよう支援していきたい。

7、指導計画 (全 11 時間)

- | | |
|--------------------|-----------|
| 1. 私と家庭生活 | 3 時間・・・本時 |
| 2. 近隣の人びとの生活を見てみよう | 4 時間 |
| 3. ふれあいの輪を広げよう | 4 時間 |

8、本時の学習

・目標

様々な家族の立場を演じることを通して、家族の一員として、また男女平等の家事分担やよりよい家庭生活の在り方を考えることができる。

・展開

主な学習活動	支援の留意点・ポイント	評価の観点と方法
1、本時の学習について知る。	1、本時は家族の一員として、家事分担やよりよい家庭生活の在り方を考える学習であることを伝える。 意識の変容をとらえるため、短時間で事前アンケートを実施する。	
2、場面Aの会話文を考え、グループ内で紹介し合う。	2、個々で会話文を考えることで、脚本作りに慣れさせたい。会話の数や登場人物は、無理のない程度で取り組ませる。想像力が膨らむよう、いくつかの例を紹介してもよい。グループ内で紹介し合うことで、互いのよさを発見し、友達の家族に対する考えや役割意識の違いなどに気づくようにしたい。 次の活動にスムーズにつながるよう、雰囲気を和らげておく。 全体の場合では1～2人の例を取り上げて紹介する	・興味をもって会話文を考えることができる。 (関・意・態) ☆観察 ☆発言
3、場面Bの会話文をグループで作し、ロールプレイをして、感想を出し合う。	3、ここでは、あらかじめ座席の固定や役割など、条件のついた場面設定を具体的に模造紙で示しておく。 グループで1～2つ考えるようにしているが、各自が考えたものの中から選択してもよいことを告げる。 ロールプレイはいくつかの役割を体験させる。 座席の位置と家事分担（食事作りや世話）が関連していることや男女の家事分担の割合が女性に多くかかっていることに気づくように、＜場面B＞の設定を男女を取り替えてやってみる。	・家族の立場になり、演じようとしている。 (関・意・態) ☆観察
4、場面Cの会話文を作り、ロールプレイをし全体で場で発表する。	4、家族の役割について考える場とする。よりよい関係を作っていくための会話を考え、互いの気持ちを受け止め合える内容の脚本作りにし、それを演じていくことで、実践への意欲につなげたい。 全体でのグループ発表では、自分たちのものと比べながら見るようにし、感想を出し合い家族関係の在り方への意識を深めていく。	・家族の一員とし役割があり、仕事を分担する大切さが分かる。 (知・理) ☆ワークシート ☆発言

5、前時の学習で気づいたことを出し合う。	5、「食卓の座席に関するアンケート」の集計結果を提示し、自分の家庭は、どんな家族関係であり、家事分担はどんなふうになっているのかを考える場にする。 男女平等の家事分担や家族の一員としてよりよい家庭生活をおくっていく上で、大切なことは何かを考えていく。	・家庭生活を振り返り、自分の問題点や課題を見つける。（関・意・態） ☆感想
6、学習を振り返り、感想を書いて話し合う。	6、学習を振り返り、学習への意欲や関心などを自己評価させ、意識の変容にも気づかせていく。 歌手山本コウタローの「家事は自事」という対談での内容を紹介し、家事をすることは生きる力であることを伝える。	

・準備

事前意識調査・感想用紙、「家事分担について考えるワークシート」、「家事は自事」資料
アンケートの集計結果、「家事時間の比較グラフ」

資料1「事前・事後意識調査」

事前意識調査・感想用紙

6年 組 ()

学習前の意識調査

1. あなたは、「男は外で仕事をする、女は家で家事・育児をするほうがよい」という考え“性別役割分業意識”についてどう思いますか。当てはまるものを選んでください。

1. 賛成である

2. やや賛成である

3. 反対である

4. やや反対である

5. どちらでもない

6. わからない

2. あなたは、家の仕事（食事作りや洗たく、掃除など）のことで日頃、感じていることがありますか。

.....

.....

.....

＜脚本作り＞

1. 楽しかった

2. まあまあ楽しかった

3. あまり楽しなかった

4. 全く楽しなかった

5. わからない

5. 今回の学習内容に関心がもてましたか。

1. 大変もてた 2. まあまあもてた 3. あまりもてなかった

4. 全くもてなかった 5. わからない

6. ロールプレイを積極的にできましたか。

1. よくできた 2. まあまあできた 3. あまりできなかった

4. 全くできなかった 5. わからない

7. この学習に関して思ったことを自由に書いてください。

学習後の感想

3. あなたは“性別役割分業”の考え方をどう思いますか。

1. 賛成である

2. やや賛成である

3. 反対である

4. やや反対である

5. どちらでもない

6. わからない

★学習前と考えが変わった人は、どう変わったのか、簡単に書いてください。

.....

.....

.....

4. 脚本作りやロールプレイ（役割演技）をしてどうでしたか。

資料2「家事は自事」

家事は自事

山本コウタロー

家事をやって良かったと思うことは、何かありますか。

そりゃ膨大にあります。まず、自分が生きているということはどういうことかが分かる。人間、生きていく上で食べたり片づけたりというのは経済活動と共に必要なことでしょう。……家事と呼ばず自らのこと、「自

事」と呼んでいるんです。……また二人のコミュニケーションが楽になることも「自事」のメリットだと思う。……二人とも家事をしていれば家庭内のトラブルにも即応できる、お互いのことが理解できるようになる。……洗剤や生活廃水を流す、たとえばそれがそのまま川から海へ流れていく……これでいいのかということが実感として分かります。野菜の農薬というのにも気にかかるんです。エコロジーの考え方に「地球規模で考え、地球規模で行動しよう」ということがあります、家事を通してこの標語が生きてくる。

(旭化成・共働き家族研究所 『DEWKS net VOL. 5』1990年より抜粋)

資料3 「家事分担について考えるワークシート」

資料3 授業実践用 ワークシート

家事分担について考えるワークシート

6年 組 名前

<場面A>

母 「今日は帰りが遅くなるので、子どものお迎えと夕食をお願いね。」
 父 「 」
 () 「 」
 () 「 」
 () 「 」
 () 「 」

1. 次の文に続けて会話文を考えてみよう。(できる人は5コマ以上続けてもよい。さらに、登場人物を加えていってもよい。)
2. 感想を書こう。

.....

.....

.....

<場面B>

父 「おーい、箸としょう油がないぞ。」
 母 「 」
 () 「 」
 () 「 」
 () 「 」
 () 「 」

1. 上の文に続けて会話文をグループで1～2つ考えてみよう。
2. 作った脚本で、演じてみよう。それぞれの役割を決め、ロールプレイ(演技)をしてみよう。
3. ロールプレイをしてみて、思ったことを話し合おう。

.....

.....

4. 他のグループの演技を見て、感じたことを話し合おう。

<場面C>

母 「ちょっと、夕食の準備を手伝ってちょうだい。」
 私 「 」
 父 「 」
 () 「 」
 () 「 」
 () 「 」
 () 「 」

1. 上の文に続けて会話文をグループで1～2つ考えてみよう。
2. 作った脚本で、演じてみよう。それぞれの役割を決め、ロールプレイ(演技)をしてみよう。
3. 脚本を作り、ロールプレイをしてみて思ったことや、母親、父親、子どもなどの家族の役割について思ったことを話し合おう。

.....

.....

.....

5. 学習の結果

授業実践後の子どもたちの感想からは、「寸劇を見ていたら、自分も自分のことをしなないといけないと思いました」「家事をするのはお母さんだけでなく家族みんなで役割を決めてやった方がいいと思いました」「自分からも進んで食事の手伝いをした方がいいと思った」など、家族の中での自分の役割を再認識し、既存の性役割に捉われることなく、新しい関係を築いていこうとする姿が確認された。

また、これらの学習後に、家庭での課題として、1組には「学習したことを家の人に伝えよう」という課題を、2組には「母親の座席に3日間座る」という課題を与えた。1組では家族との話しあいは、「うちは、ほとんど(家事をするのは)お母さんだから、時々お父さんにも手伝ってほしいなあと言っていました」という感想にみるように、「願望」にとどまった。これに対し、2組では、「お母さんの席にいて、手伝いをするのがえらかった(大変)。とくに、お茶を出すのがえらかった」「お母さんがすごい仕事をしていると思った」「やっぱり、各自でえ動いたりして欲しいと思った。だから、これからは自分でなるべく動くようにしたいと思った」など、実感をともない、行動に結びつく記述がなされていた。

以上から、家庭における実践という点からみた場合、話し合い単独よりも行動をとる課題を与えた方がより効果的であることが認められた。

V. おわりに

本研究では、食卓の座順に注目し教材化することによって、子ども自身がジェンダー問題に気づく授業プログラムを開発することを目的とした。

鳥取県内の小学校保護者 212 名と児童 105 名、中学生 158 名を対象として、食卓の座席に関するアンケートを実施し、食事作りや食事の世話をしている女性の座席は、台所に近い位置にある点が明らかになった。ここから、食卓の座席の位置関係は、多くの場合、既存のジェンダー規範を反映しており、無意識のうちに子どもたちが性別役割分業意識を形成する要因のひとつになっていることが明らかとなった。

こうした食卓の座順にみるジェンダー問題に注目して、小学校家庭科の授業プログラムを作成し実践を行った。ここでは、既存のジェンダー規範への気づきと新しい規範（男女共生にむけたルールづくり）の育成、子どもの主体性を重視した問題解決型の学習の 2 点を組み込んだ授業実践を構想し、教育方法としてロールプレイングや脚本づくり（寸劇）を取り入れた。さらに、食卓の座席の位置関係に注目した教材を開発し、既存のジェンダー規範への気づき、新しい規範の形成を目指すこととした。

授業は鳥取県内の小学校 6 年生 2 クラス（1 組・2 組、45 名、男子 25 名、女子 20 名）を対象として実施した。対象者に事前に実施した食卓の座順に関するアンケートによると、40 名（95%）の子どもが食卓の座順が固定していると回答し、さらに全体の 8 割の子どもが台所の近くに母や祖母が座ると答えた。なお、主に食事をつくる人は母と祖母を合わせると 9 割であった。こうした実態を踏まえ、授業では食卓における家族の会話をテーマとした寸劇を子どもたちがつくり、家族の役割を演じることを通して、既存のジェンダー規範に対する気づきを促し、新しいルールづくりを提案し実践する力の育成を目指した。

本研究を通じて、授業における子どもたちのジェンダー意識や態度の変容を促し、家庭での実践に結びつける方策の開発までは達成された。しかし、家庭での実践を継続するための教育支援が課題として残されている。また、家庭環境により家事分担の意識の違いは大きく、家族に協力しようとする気持ちを持ちにくい子どもたちへの効果的な支援のあり方を検討する必要がある。

したがって、対象児童の追跡調査を行うことや家族に協力しようとする気持ちを持ちにくい子どもたちへの効果的な支援のあり方の検討が今後の具体的な課題といえる。さらに、鳥取県における男女共同参画型社会への取り組み状況やその問題点などを見極め、地域・家庭・学校が協力してジェンダー問題に取り組むことができるような教育環境をつくることが求められている。その際、本研究で示した食卓における家族関係の視点や食教育の視点が重要であることは言うまでもない。今後、こうした課題の解決に向けた教育研究を進めていきたい。

¹ 石毛直道、食卓文化論、石毛直道・井上忠司編、現代の日本における家庭と食卓―銘々全膳からチャブ台へ―、国立民族学博物館研究報告別冊 16 号、1991 年、p.42.

² 井上忠司著、「家庭」という風景～社会心理ノート～、1988 年、NHK ブックス。

³ 同上 1)

⁴ 村元直人、食卓における座順の調査、函館短期大学紀要第 26・27 号、2000 年、pp.33～41.

⁵ ロールプレイング (Role-playing) は、モレノ (Moreno, J.L.) のサイコドラマ (心理劇) において概念化され、発展してきたものである。この用語は現在、サイコセラピーとしての Role-playing から、教育や医療場面等まで幅広く用いられている。今までの自分とは異なる役割を体験させることによって、演ずる人に気づきや自己洞察、感情が吐露されて気持ちが楽になったりすることで、見ている者も多くのことを学ぶことができる技法である。役割をとりながらの自発的学習といった意味合いを持っている。Role-playing は、わが国では「役割演技」と訳されているが、「ロールプレイ」という呼称も広く用いられている。

